



探してい
た解

川崎ゆきお

難解そうに見える解答は実は既に手に持っているのかもしれない。難解なだけに、色々と昔から考え込んでいたはずで、そのとき出した解答は、もう忘れていてるかもしれない。解答は出しでも、実行していないため、別の解答を出して、その場を乗り切った場合、最初の解答はもういらなためだろう。または役に立たなかったので、用済みのため。

「答えは己が知っておろう」とは師匠の口癖。この場合、難解なのではなく、答えは最初か分かっていた事柄だ。ただ、それを実行するのに躊躇する。他に口当たりのいい解答はないかと探すのだ。そのため、難解になる。

「答えは色々あるでしょ。一つじゃないのでしょ」弟子が聞く。

「答えが色々あると困るだろう。選ぶのに」

「はい、困ります」

「だから、一つの方が動きやすい。だから、解答は一つでいいのじゃ」

「その一つはもう知っているわけですか」

「本人がな」

「いつ」

「いつとは」

「どの時期に」

「ああ、おそらく子供から大人になるあたりだろう」

「そんな早い時期に解答を出していたのですか」

「今、問題になっているような問題の解答とは違うが、考え方の発想がその頃、できておる。しかも今よりも鋭利に、そして深く」

「学生時代がそうでした」

「その頃は世界も広く、そして深かったはず。世界はさほど変わっていないが、頭の中での追い込みが深かったはず」

「ありました。あの頃の方が賢かったのですが、今の若者を見ていると馬鹿に見えますから、不思議です」

「君が若い頃も、馬鹿と見られていたのだろう。この世間知らずが、と言うようにね」

「はい」

「ところが三十も過ぎ、四十にもなろうとする頃には世界は狭くなっておる。世界は昔のままじゃが、発想がね。これを大人になったといい、大人しくなったという」

「大人を踏んでいますねえ」

「余計なことを」

「はい」

「人間の脳は楽な方へ楽な方へと行きたがる。頭の中でのアクセスを減らしたいのだろう。省エネを好む。それだけのことだ」

「それで、どうすればいいのでしょうか」

「だから、青少年時代に出していた解答を参考にすればいい。少しは覚えているでだろ」

「はい」

「そこが君の原石に近い。それを使うのがいい」

「考え直せとは、もっと前に考えていたところまで引き返せということですか」

「そうだね。未来は過去にある」

「解答は過去にあるのですか」

「人の悩み事や、人や社会が絡む問題の多くは、大昔とそれほどパターンは変わっておらん。同じことが繰り返されておる。だから、その大昔に出した解答が使えたりするのだ」

「歴史から学ぶということですか」

「そんな大きな問題じゃなく、君の話だろ」

「そうです」

「だから、個人史の話になる」

「僕の個人史ですか。そんな本はありません」

「個人史と言うより、ただの思い出でいいのだ」

「探していた答えは既に持っていたという展開を期待してみます」

「ああ、できるだけ若い頃に考えていたことの方が、新鮮で生きがいい」

「逆なんですね。古い方がいいなんて」

了